使徒教父における聖餐観の一問題

加　藤　邦　雄

I　序

19世紀から20世紀にかけて，キリスト教史に関する幾多の優れた研究が発表された。たとえば，アドルフ・フオン・ハルナツク Adolf Von Harnack (1) の「教理史教本」Lehrbuch der Dogmengeschichte, 1886～1889, 3 Bde がある。ハルナツクは多才な歴史家であつて，その業績は今日といえども決して過小評価されてはならぬ。かれは，キリスト教がヘレニズムに觸れた時に，哲学化されたと理解して，その過程を明かにしようと試みた。しかし，それにしても，ハルナツクは依然として少くともこの教理史教本においては，キリスト教を思想史の面から見ていると言えよう。(2)

ハルナツクと並び称せられる教理史家にラインホルト・ゼーベルク Reinhold Seeberg があつて，かれの「教理史教本」Lehrbuch der Dogmengeschichte, 5 Bde. 1895～1922. はこの方面の王座を他に譲らない。ゼーベルク以後，これ程の教理史は未だ書かれていない。

エルンスト・トレルチ Ernst Troeltsch (3) は「キリスト教会及び分派の社会思想」Die Soziallehren der Christlichen Kirchen und Gruppen. 1912. なる劃期的な著作をなし，今日まで，この方面においてついにこれに勝る研究は世に出ていない

最近，エルンスト・ステエリン Ernst Staehelin が「イエス・キリストの教会における神の国の教説」Die Verkuendigung des Reiches Gottes in der Kirche Jesu Christi, 5 Bde. 1951～1959 を世に公けにした。

トレルチとステエリンとでは，一方はキリスト教の社会思想を取り扱い，他方は神の国なる終末思想を述べているが，両者に共通なことは，キリスト教を思想史としてそれぞれの面から理解していることである。

英語で書かれたキリスト教史の中で，今日われわれを驚かしている大著はラトウレツト Kenneth Scott Latourette の「キリスト教の発展」Expansion of Christianity, 7 vols, であろう。これは，2千年に亘る，キリスト教宣教の輝しい歴史の記録である。20世紀は世界宣教の時代であるが，この世紀の年において，この種の大著が世に出たことは当然であろう。

註 I (1) Adolph von Hamack (1851～1930) は晩年 (1889～1921) ベルリン大学で教鞭を執つた。教理史全般を講じたが，何と言つて初代および教父時代の研究に偉大な貢献をなし，この方面に一つの時代を劃した。

(2) ハルナツクは，キリスト教を実践的の面から見ることを，けつして，忘れてはいないで「最初の三世紀間におけるキリスト教の伝道と発展」Die Mission und Ausbreitung des Christentums in den ersten drei Jahrhunderten, 1902, ではその面を明かにした。

(3) Ernst Troeltsch (1865～1923) も，ハルナツクと同様に神学思想においてはリツチユル A. Ritschl の弟子であつて，哲学者として新カント派に属する。

しかし，キリスト教史をさらに正確に把握するためには，キリスト教思想史や伝道史のみでなく，サクラメント Sacraments, die Sakramente あるいはそれを中心として行われる礼拝 Liturgy, die Liturgie の変遷を研究することが不可欠であると考える。(4) それは，キリスト教思想が，そのようなサクラントや礼拝形式に具体化されているべきであると考えると共に，サクラメンや礼拝形式がキリスト教思想に深い影響を与えることも多いと考えられるからである。すなわち，キリスト教思想は，いつでも，リタージーを生み出す原因であつたとは必ずしも断言できないのであつて，両者は一層深い所で結合していたと考えたい。

そこで，新約聖書が書かれた使徒時代が終つて，教会がようやく古カトリック時代に入ろうとする頃，教会のサクラメントの形式およびそれの理解の仕方に変化が生じつつあつたのではないかと想像される。この点から，紀元100年頃から半世紀間に，教会の聖餐式がどのように変化したかを研究して見たい。ただし，この時代における聖餐式のもつすべての問題に觸れることはできないので，限られた僅かの点のみを取り上げて見たい。

まず，聖餐式に関連する二，三の語を取り上げて，それがどのように用いられていたかを検討したい。次ぎに，そのことが教会においてどのように理解されていたかを調べて見たい。そこで，このような見地から取り上げた用語は第一に「トラペザ」trapeza，第二に「ツシアステーリオン」thusiastērion，第三に「ツシア」thusia の三つである。最後にこれらの用語が「エピスコポス」episkopos の職能とどのように関連しているかを，調べて見たい。

II 使 徒 教 父

使徒教父 Apostolic Fathers, Die Apostolischen Väter は最も古くは (G. B. Cotelier, 1672) 次のような5人を指すと理解されていた。(1)

バルナバ書簡 Barnaba Epistolē. The Epistle of Barnabas. Der Barnaba-brief. の著者

「コリント人への書簡」Pros Korinthious. To the Corinthians. I Klemensbrief. の著者，ローマのクレメンス Klemens, Clement.

スミルナの教会，司教ポリカルポス，エペソの教会，マグネシアの教会，フィラデルフィアの教会，トラリアの教会，ローマの教会へそれぞれ書簡を書いて送つた，アンテオケの司教イグナティオス Ignatios, Ignatius.

ピリピの教会へ書簡を書いて送つた，スミルナの司教ポリカルポス Polykarpos, Polycarp.

ヘルマスの牧者 Poimēn. The Shepherd of Hermas, Der Hirt des Hermas. と称せられる文書の著者。

しかし，間もなく，これに次ぎの2人の名が使徒教父の中に加えられるようになつた。

---

(4) 礼拝学としては，ローマ教会と聖公会と福音主義とでは理解の仕方が相当に相違するがこの三つの立場を代表する例として次ぎの三冊を挙げたい。Lechner Eisenhofer, Liturgik des Römischen Ritus, 1953. Dom Gregory Dix, The Shape of the Liturgy, 1945. Rietschel-Graff, Lehrbuch der Liturgik, 1951.

註II(1) 使徒教父なるものについての考え方については Berthold Altaner, Patrologie. に負うところが多い。

「パピアスの断片」 The Fragments of Papias, Die Fragmeute Papias. の著者，ヒエラポリスの司教パピアス。

デイオグネトス Diognetos, Diognetus への書簡の著者。

その後，これに，「十二使徒の教訓」 Didachê tōn Apostolōn, The Teaching of The Apostles, Die Lehre der Zwoelf Apostel. や，イグナテイオスの殉教記，ポリカルポス殉教記.Martyrion, Martyrdom, Das Martyrium. などが加えられた。

ライトフート Lightfoot は19世紀の末頃に，「使徒教父」 The Apostollic Fathers なる書物を出したが，その中には，次のものを收めた。

ローマのクレメンスの書簡（第一および第二を含む），イグナテイオスの七つの書簡，ポリカルポスの書簡，ポリカルポスの殉教記，十二使徒の教，バルナバの書簡，パピアスの断片，イレネウスの中に保存されている長老たちの言葉の断片。グードスピードは，ライトフートの「使徒教父」を定本として，次のような，「使徒教父」のコンコーダンスを作製した。 Index Patristicus Sive Clavis Patrum Apostolicorum Operum。 グードスピードのこのコンコーダンスは非常に便利ではあるが，使徒教父をライトフートが挙げた人々に限定することは困難である。なぜならば，その中には他のものに比してかなり後の時代に属すると推定される，クレメンスの第二書簡，デイオグネートスへの書簡が含まれており，さらにポリカルポス殉教記をかれの書簡と全く同時代のものとして取り扱うことにも，疑問がある。

使徒教父なるものを定義することは困難である。他に「使徒」あるいは「使徒的」の名を冠するものに「使徒信条」 Apostolicum Symbolum, The Apostles' Creed., Das Apostolische Symbol. や「使徒憲章」 Diatagai tōn hagiōn apostolōn, The Apostolic Constitutions, Die Apostolische Konstitutionen. があるが，これらのものが直接使徒たちに連なるものでないことは言うまでもない。そこで，「使徒教父」と言う場合，使徒たちと師弟関係のあつた人々をあたかも指すかのごとくであつたが，今日から見れば，むしろ使徒の時代に直ちに続く時代すなわち post-apostolic, nach apostolisch の時代におけるキリスト教界の有力な指導者たちと解釈したい。ただし，このような指導者たちと言つても，文献によつてのみ知られる人々に限定され，しかも文献の名は判明していても，著者の名をついに知り得なかつた人々が多くある。

グードスピードは，使徒時代に直ちに続く時代に活躍した指導者たち乃至その著作を次のような年代に配列した。言うまでもなく，その年代の決定の仕方においては異論がいくらもあるのではあるが，それを参考までに掲げて置く。(2)

年　代（大体の年を示す）	
95	ローマのクレメンス
95 — 100	ヘルマスの牧者
100 — 110	ペテロの説教
100 — 110	使徒の教（短い形）

註 (2) Edgar, J Goodspeed, A History of Early Christian Literature, pp. 309 ff. を参照。

110 — 117	アンテオケのイグナテイオス
70 — 157	スミルナのポリカルポス
120 — 130	ヘブル人の福音書
120 — 140	ペテロの福音書
130	バルナバの書簡
125 — 130	クワドラトスの弁明
125 — 150	ペテロの黙示録
130 — 140	エジプト人の福音書
130 — 140	英博物館福音書
137 — 147	アリステイデスの弁明
138 — 150	マルキオン
140	パピアスの釈義
140	ペラのアリストの対話
140 — 160	使徒の書簡
150	使徒の教（長い形）
150	ソロモンの讃歌
150	トマスの福音書
150 — 165	ユステイヌス
150 — 165	クレメンス第二書簡
150 — 175	マツテアの伝承
181 — 189	イレネウス
190 — 210	アレクサンドリアのクレメンス
160 — 225	テルトリアヌス
170 — 263	ヒツポリトス
185 — 254	オリゲネス
210 — 258	キプリアヌス
200 — 300	ディオグネトスへの書簡

なお，以上の中で，一般に新約聖書外典と言われる一群の書物の中に次のようなものは見出される。ペテロの説教，ヘブル人の福音書，ペテロの福音書，ペテロの黙示録，使徒の書簡，トマスの福音書，マツテアの伝承，(The Apocryphal New Testament, trauslated by M. R. Games Oxford, 参照。)

以上述べて来たことによつて明かなごとく，使徒教父なるものを限定することはほとんど不可能であるので，むしろ，使徒時代に直ちに連なる時代，すなわち，大体において紀元100年前後から約半世紀の間にあらわれたキリスト教界の指導者たちを，その残した文献によつて不完全ながらも知つて見たいのである。したがつて，一方では，新約聖書の中でも比較的遅れて書かれたと思われる文書をよく検討しつつ，他方では，それに直ちに連なる時代に書かれたと思われる，ローマのク

レメンスの第一書簡，ヘルマスの牧者，ペテロの説教，使徒の教（デイダケー）などを最も重要な資料として用いながら，次第にイグナテイオス，ポリカルポス，バルナバの書簡などに言及して行きたい。(3) 同じローマのクレメンスの名が付けられていても，その第二書簡は第一書簡とは相当区別したい。デイオグネトスへの書簡は非常にすぐれた内容を盛つてはいるが，それをそのまま使徒教父的のものとして用いるには躊躇せざるを得ない。(4)

Ⅲ 食　　卓

聖餐式を行うとき，聖餐物質 Elements を載せるに用いる食卓 table がある。これが何と呼ばれていたかを調べて見たい。まず，食卓としては，ギリシヤ語のトラペザ trapeza なる語が当然出て来る。これを，旧約聖書のギリシヤ語訳（普通これを七十人訳と呼び，LXX なる略称であらわすのを常とするが）の中にトラペザを探して見ると，次のような四つのヒブル語の訳として用いられていることが判明する。(1)（括弧内は口語訳。）

1. lehem サムエル上 20 章 24（食事）　27（食事）。
2. paḥ-bag ダニエル 1 章 5（食物），その他。
3. sh^{e}er 詩 78 篇 20（パン）。
4. sh$^{ul^{e}}$ḥan この語は60回以上用いられているが，一般的な意味で単に「食卓」と訳されている場合，たとえば，サムエル上20章29，34のサウル王の食卓というような場合と，エルサレム神殿における祭祀に用いられる供えのパンをのせるアカシアの机，たとえば，出エジプト記25章23，27，28，30などの場合とある。

ここに三つの点に注意をうながされる，第一に，トラペザと訳されたシユルカーンは本来日常生活に用いられた食卓の意味であつたことである。しかし，第二に，これが神殿の祭祀に用られる時，それは供えのパンを載せる特定の机を意味したことである。第三に，トラペザは，どこまでも供えのパンを載せる机であつて，いわゆる altar とは明確に区別されていたことである。この第三の点については，マカビイ第 1 書 1 章22，23，4 章49を参照したい。(2) 旧約聖書において，トラペザ（食卓，机）がただの 1 回も祭壇（altar）に混同されなかつたことは，相当重要な意味をもつ

註 (3) この時代の文献の代表的なものを手軽に見るためには次のものが便利である。Library of Christian Classics, Vol. I. Eirly Christian Fathers.

(4) デイオグネートスへの書簡の書かれた年代をグードスピードは200—300年と決定したが，アルターナーなどは，2 世紀後半にまでさかのぼらせている。

Ⅲ(1) 70人訳のコンコーダンスとして，次のものを使用した。Hatch-Redpatch, Concordance to the Septuagint, 2 vols。

(2) I Maccabees (Revised Standard Version) 1 : 22, 23,

He arrogantly entered the sanctuary and took *the golden altar*, the lampstand for the light, and all its utensils. He took also *the table for the bread of the Presence*, the cups for drink offerings, the bowls, the golden censers, the curtain, the crowns, and the gold decoration on the front of the temple he *stripped it all off*.

ている。なぜならば，紀元2世紀になると，後に述べるように，両者が混同されたり，あるいは置き代えられたりしたからである。

新約聖書において，トラペザなる語がいかに用いられていたかを，次ぎに，一べつしたい。(3)

1. マタイ15章27，マルコ7章28，ルカ16章23，22章21，使徒行6章2，ローマ11章9，コリント1書10章21では「食卓」と訳されている。
2. 使法行16章34では「食事のもてなし」と訳されている。
3. ルカ19章「銀行」と訳されている。
4. ヨハネ2章15，替両人の「台」である。
5. ヘブル9章2「燭台と机と供えのパン」なる表現がある。

この中で，3と4とは，ほとんど，問題とならない。ヘブル書においては，旧約の出エジプト記と同様に「供えのパン」を載せる「机」のことが述べられているが，旧約の祭祀に言及することの多いヘブル書としては当然のことであろう。新約におけるトラペザの用法として非常に重要な個所は，言うまでもなく，主イエスの最後の晩餐に用いられたものがこのトラペザであつたことと，パウロがコリント書の中で主の晩餐に言及した個所でも同様にこの語がはつきりと用いられていることとである。これによつて判るように，主自身が用いられた食卓と，パウロの時代の聖餐のそれとは，同じものであつた。すなわち新約の時代に，聖餐物質を載せるものは，けつして祭壇（altar）とは呼ばれていなかつた，と断定を下しても大きな誤りはないであろう。

ここで，旧約や新約におけるトラペザなる語の検討から少し離れることになるが，聖餐式の起源と深い関連をもつていると一般に言われているアガペー agape（愛餐）のことに少し觸れねばならぬ。この時代において，地中海を中心としたほとんどすべての場所において，葬式のときこれに類する会食がなされていた。その場合，供えられた食物は元来死者が食すると考えられていたが，後には単に死人を追憶するための会食となつた。しかし，死人に関連した会食よりも，もつと多くなされたのは，多くのギリシヤ的な都市にできていた同業組合（ギルド）が常におこなつた会食であつた。また，これとよく似た習慣が当時のユダヤ人の間にも行われていたことは，ユダヤ人の歴史家ヨセフス Josephus (4) の書いた「ユダヤ古代史」5巻10章8節の中で明かにされている。すなわち，当時，ローマに在住するユダヤ人たちがかれらの習慣にしたがつて会食をすることは禁止されていない筈であるとヨセフスが同胞のために弁じている文章がある。(5)

もしも，新約聖書の書かれた時代に，ユダヤ人の間においても，また異邦人，ことにギリシヤ人の間において，会食が習慣として行われていたとするならば，そして，キリスト者のアガペーなる

註 (3) Alfred S h noller, Handkonkordanz zum Neuen Testament (Text nach Nestle) によつて trapeza を調べた。

(4) Flavius Josephus (C. 37—C. 100) はパレスチナの生れ，祭司の家の出で，パリサイ派に属した。エルサレム滅亡を中心としてローマ官憲とユダヤ人との間に立つた。77,8年頃「ユダヤ戦史」Peri tou loudackou *polemou* を，94年頃「ユダヤ古代史」*loudack archaiologia* をあらわした。

(5) 英訳によつてヨセフスの文章の一部を引用する。Now it does not please me that such decrees should be made against our friends and confederates, whereby they are for bidder to live according to their own customs, or to bring in contributions for common suppers and holy festivals, while they are not for bidden so to do even at Rome itself.

愛餐がこれと平行して行われたとするならば，愛餐と密接な関係をもつている聖餐のエレメンツを載せるものは，祭壇ではなくて食卓でなければならない。

さらに，新約聖書における終末的な神の国の信仰から見るときに，神の国は一大会食乃至一大宴会として表現されている。マタイ26章29，マルコ14章25，ルカ22章16，30等を参照。このような，終末的な神の国が成就した時，主イエスを中心とした盛んな会食 commonmeal あるいは宴会 banquet が開かれるが，これに参加する者は互いに完全な交わりを許され，その喜びにあずかるのである。この場合，会衆の中から1人1人が祭壇の前に進み出て，司祭から1人1人ずつパンを与えられる光景とは本格的に相違するものがある。

次ぎに，いよいよ使徒教父の文献の中に用いられているトラペザなる語を検討して見たい。グードスピードのコンコーダンスによると，この語は次のような3カ所にしか用いられていない。

ローマのクレメスの第1書簡，43章2，　使徒の教，11章9

ディオグネートスへの手紙，5章7。

この中で，ディオグネートスへの手紙の例は，しばらく，卓上に置きたい。(6) まず，問題となるのは，「クレメンス書簡」と「使徒の教」とである。クレメンス書簡の文章はこうなつている。「これらのものを彼れは取り，部族の長たちの指環でこれらのものに封印をして，しばつた。そして彼れはそれを証しの幕屋の中で神の机の上に置いた。」ここで言う「彼れ」とは モーセ のことであり，「これらのもの」とは部族をあらわす杖である。したがつて，ここでの「机」とは大体においてヘブル書9章2の「机」のようなものであると考えられよう。とにかく，それは聖餐用の聖卓 holy table ではない。「使徒の教」，普通「デイダケー」と称せられる文章の方では次のようになつている。「もしも予言者が聖霊によつて，食卓を指定するならば，かれはそれから食してはならない。もしも予言者がそれをなすならば，かれは偽りの予言者である。」この文章の前半の意味は明瞭でないが，メシアを中心とする会食を示しているようである。それはそれとして，この食卓がそのまま聖餐のそれのようには見えない。断定はできないが，聖餐よりは愛餐に関連した言葉のように見える。(7)

使徒教父の文献の中で，トラペザなる語が直接に明瞭に聖餐の卓を意味していると判断される個所は見当らない。もし，強いて言えば，それと間接的な関連をもつと考えられる「使徒の教」の個所がただ一つあるのみである。ディオグネートスへの書簡の場合，トラペザは明白に共同の食卓を意味していて，聖餐のそれを直接に示してはいない。

言うまでもなく，愛餐は第1世紀から第2世紀と時がたつにつれて次第に重んぜられなくなつた

註 (6) ディオグネートスへの手紙5章7は次のようになつている。「かれらは互いにその食卓を共にするが，結婚の床は共にしない。」グードスピードの意見にしたがつて，もしも紀元200年—300年の頃に本書が書かれたとすると，その頃まで，会食の習慣が残つていたことになる。しかし，アルターナーのごときは，Meeham や Marrou の意見にしたがつて，紀元2世紀の後半に本書が書かれたと考えている。
Altaner, Patrologie, S. 108. 参照。

(7) 「使徒の教」9章1—10章1に聖餐に関する規定があるが，これはパウロ流の聖餐式ではない。多分に最原始教会で聖餐と愛餐とがまだ分化しなかつた時代の形を保存している。ただし，この個所にトラペザなる語は用いられていない。

であろうが，それにしても，2世紀後半に至つても全く消滅はしないでいたものと思われる。デイオグネートスへの手紙はそのことを示しているのかも知れぬ。また，イグナテイオスのローマ書7章3にも明白に「愛餐」に言及した個所があるので，紀元2世紀の初頭にそれが行われていたことには疑いがない。しかし，聖餐式の物質が載せられるものが2世紀においては，次第にトラペザと呼ばれなくなつたのではないかと，推定せざるを得ない点があるようである。

Ⅳ 祭　　壇

聖餐物質を載せるものを，新約聖書の時代においてはトラペザと呼んでいた，と大体において断定して大きな誤りはないと思うが，後の時代になるとそれは祭壇 altar と呼ばれているように見えるので，その辺の事情をできるだけ客観的に調べて見たい。なぜならばこの辺の事情については，在来，教派的な前提か偏見にわざわいされて正確な事実がほとんど知らされていなかつたからである。すなわち，ある教派において，聖餐物質は当然のこととして altar に置かれているからである。

まず，altar に相当するギリシヤ語 thusiastêrion なる語を，旧約聖書70人訳を開けて見ると，それは主として mizᵉbêḥa なるヒブル語のギリシヤ訳が圧倒的に多い。(1) mizᵉbeḥa（アラム語やシリア語では madᵉbeḥa と変つた）は一見して判るように zabah すなわち，「犠牲としてほふる」または「ささげる」ことを意味する。(2) そこで，mizᵉbeḥe は，動物を「ほふる場所あるいは犠牲としてささげる場所」である。このことはギリシヤ語の thusiastêrion（祭壇）がだれにも判るように thusia（犠牲）から変化したのと全く同一である。これに比して，英語の altar はラテン語の altus（高い）に由来するので，そこで何がささげられるかと言うことには直接には関連をもたない。(3) そこで，教会が聖餐を載せるものとして altar なる語を用いたこと自体に問題があるのではなく，それが旧約聖書における mizᵉbeḥa から系統を引くところのものとしての altar であるか否か，に問題がある。旧約聖書において mizebeha は「供えのパン」を置く「机」と明かに区別されている。まして，日常生活に用いられる食卓とは完全に区別されている。旧約外典の中にあるマカビイ第1書1章21，54，59，4章44，49などを見ると，「供えのパンの机」と「祭壇」とは明白に区別されている。

新約聖書において thusiastêrion なる語はたくさん用いられているが，マタイ5章23，23章18，23章20，23章35，ルカ1章11，11章50，ローマ11章3，コリント1書9章13，10章18，ヘブル7章13，13章10，ヤコブ2章21にある thusiastêrion は旧約聖書にあるようなエルサレム神殿の中にあるそれか，あるいはそれと同じ類型に属する祭壇を意味している。ところが，ヨハネ黙示録の中にこ

註Ⅳ(1) thusiastêrion と訳された mizebeha は余りにも多くて引用く切れないが，創世記では，8章20，20，12章7，8，13章4，18，22章9，26章25，33章22，35章1，3，7である。旧約外典の中にある，マカビイオ1書では次の個所に thusiastêrion がある。1章21，54，59，4章38，44，45，47，49，50，4章53，56，59，5章1，6章7，7章36。

(2) zabah を Gesenius は zum opfer schlachten, opfern と訳し，Köhler は schlachten と解する。

(3) altar の語義については，Encyclopae-dia Biblica の altar の項を参照。

の語が相当数用いられている（6章9，8章3，5，9章13，11章18，16章7）。ヨハネ黙示録は，エルサレム神殿における祭儀的な礼拝形式を巧みに援用して，神の国の幻を描いたが，その中に祭壇なる用語が当然用いられた。しかし，6章9に「神の言のゆえに，またその証しを立てるために殺された人人の霊魂が，祭壇の下にいるのを，わたしは見た」と言うような場合，それは，単に旧約的な表現の援用であつたのか，それとも，当時の教会がその礼拝において文字通り祭壇を使用し始めていたことの反映であるのか，軽々しくは断定を下し得ない。ただ，この祭壇なるものがすでにキリスト教会に使用されていたと仮定しても，そのことの直接の証拠がヨハネ黙示録の中にあるとは言えない。

ヨハネ黙示録が書かれたと大体同じ時代（96年頃か）にローマのクレメンスがコリント教会に書き送つた「第1書簡」を見ると，32章2，41章2に「祭壇」なる語があるが，それは旧約時代の祭司やレビ人がエルサレム神殿でささげ物をした祭壇のことに言及した文章であるので，直接にその時代の教会のことを述べてはいない。しかし，それだからと言つてローマのクレメンスの書簡の中に聖餐を古カトリック教会的に理解しようとする思想が全く見られない，と容易に断定を下すことは警戒せねばならぬ，そのことについては後に述べる予定であるが，ここでは，ローマのクレメンスの第1書簡の中には，聖餐の机を祭壇と呼んだ文章が見当らない，と言うことのみで止めねばならぬ。

ヘルマスの牧者（mandatorum 10：2：2-3，Similitudinum 8：2：5）の中に数回 thusiastêrion なる語が用いられているが，いずれも，神の審判の場所の表現として用いられているので，聖餐式とは全く関係のないことがらであろう。

アンテオケの司教イグナテイオスの書簡の中に thusiastêrion なる語は次のように数回用いられている。しかも，これは決定的な重要性をもつと考えられるが故に，引用したい。

ローマ書2章2

「祭壇がすでに備えられているので，神への供え物として私が（血を）流すこと以外のことは許してもらいたくない」

これは，間近かに迫つた殉教を，祭壇の上で供え物として自らの血を注ぐことである，と表現しているから，この祭壇が直ちに聖餐に関連をもつているとは考えられない。

マグネシア書7章2

「あなた方すべては，神殿が一つであるように，神がそうでいますように，急いで一つになりなさい。すなわち，一つの祭壇へ，ひとつのイエス・キリストの許においでなさい。」

フィラデルフィア書4章1

「それ故に一つの聖餐を守るようにあなた方を注意を払わねばならぬ。それは，われらの主イエス・キリストの一つなる肉，および主の血と一つになるための一つなる杯があるからである。一つなる司教があるように，一つなる祭壇がある……」

ライトフートのテキストによると，この文章で，「それは」以下「一つなる祭壇がある」までは括弧に入れられているが，リチャードソンが編成した The Library of Christian Classics Vol. I. Early

Christian Fathers, p. 108 ではその個所が括弧に入れられていない。しかも，このテキストの欄外にはわざわざ次のような註が加えられている。「聖餐の食物が犠牲としての意味をもつていることをこの祭壇なる語があらわしている」と。聖餐の聖卓を祭壇と呼んだ個所がイグナテイオスの文書の中で，ここ一カ所のみであつたとしても，またこのテキストにライトフートが幾分の疑問を抱いていたとしても，イグナテイオスにこのような考え方があつたことに疑いをさしはさむ余地はない。それは，このテキストの真偽性によるよりは，イグナテイオスにおける「犠牲」の思想が，実は，かれよりも早い時代においてすでに始まつているからである。

V 犠　　牲

Thusiastérion（祭壇）なるギリシヤ語は，前述のように，thusia（犠牲）なる語に由来する。そのことは，ヒブル語においても同じであつて，「犠牲」を意味する zebah（ゼバツハ）は家畜を「ほふる」ことを意味する zabah（ザーバツハ）に由来する。創世紀31章54，46章1，出エジプト記12章27，18章12など参照。また，旧約聖書の中にも幾分用いられ，新約時代のユダヤ人が日用語として用いたアラム語においても，犠牲はデバツハであつて，「ほふる」なる語に由来する。エズラ書6章3などを参照。

新約聖書において，「犠牲」を意味する thusia なるギリシヤ語は次のような個所に用いられている。

マルコ9章49，12章33，ルカ13章1，使徒行7章41，42，ローマ12章1，コリント1書10章18，エペソ5章2，ピリピ2章17，ヘブル5章1，7章27，8章3，9章9，23，26，10章1，5，11 12，26　11章4，13章15，16。ペテロ1書2章5。

その中で，ピリピ2章17は「信仰の供え物」と，ローマ12章1は「聖なる供え物」と，そして，ペテロ1書2章7は「霊のいけにえ」と，キリスト者の生活，あるいはキリスト者の死を表現する。しかし，それ以外は大体において，旧約聖書にあると同じようなエルサレム神殿の礼拝の時に祭壇に捧げられる犠牲を意味するようである。したがつて，新約聖書の中で，thusia なる語が，聖餐のパンと結び付けられて用いられた例は一つもないと断言して間違いはなかろう。

ローマのクレーメースがコリント教会に書き送つた書簡を見ると，thusia なる語は次の個所に相当数用いられている。すなわち，4章1，2，10章7，18章16，17，31章3，35章12，41章2，52章3，4。しかし，そのいずれを見ても，それは旧約における「犠牲」や「供え物」を意味していて，イエス，キリストが定めた最後の晩餐に関連のあると見られる用例は一つも見当らない。そこで，ローマのクレーメースにおいて，thusia なる語は，聖餐のときに用いられたと言う例はないと言える。ところが，かれの書簡の44章4に問題となる句がある。それは，エピスコポス（司教，あるいは監督）の職能を次のように述べているからである。すなわち，かれは「供え物」を「捧げたもの」であると，表現されている。ここで「捧げたもの」なる語は prosenegkontas であつて，prospherō なる動詞の変化である。prospherō は「持つ来てる」とか「供する」とかう意味である

が，ここでは文章の前後の関係から見て，「捧げる」offer ではないかと考えられる。ここで捧げられたものは「供え物」dora であつて，thusia とは書かれていないが，その動詞は，新約聖書時代の聖餐の取り扱い方とは，多少違つたものを幾分暗示しているかのごとくである。このクレーメースの書簡の個所についてハルナツクは，Lehrbuch der Dogmengesch ichte, Bd. I SS. 231-232 におい次のてように，その見解を述べている。Die Auffassung der ganzen Abendmahlshandlung als eine Opferhandlung findet sich deutlich in der Didache (C. 14), bei Iqnatius und. vor allem bei Iustin (I. 65f). Aber auch Clemens Rom, setzt sie voraus, wenn er (C.40—44), die Episkopen und Diakonen mit der Atlichen Priestern und Leviten parallelisirt und das prospherein ta dora (44 : 4) als ihre Hauptfunction bezeichnet. ハルナツクによると，旧約の祭司とレビ人とに類比されるものと，エピスコポスとデイアコノスとが，ローマのクレーメースにおいて，すでに，理解されていて，その考え方は，イグナテイオスやデイダケー，ことにユウステイノスにも通ずる思想である，と言う。

イグナテイオスの名をハルナツクが引用するので，当然ここで，イグナテイオスにおける thusia の用法を検討せねばならぬ，しかし，イグナテイオスにおいて，前述したように，thusia に由来する thusiasterion（祭壇）なる語は数回用いられるい（Rom 2 : 2，Philad 4 : 1，Eph 5 : 2，Tral 7 : 2，mag 7 : 2）が，thusia なる語はかれがローマ教会に送つた書簡（2章2）にただ1回用いられているのみである。しかも，この場合，イグナテイオスは，かれ自らの殉教の死をそのような語によつて表現しているのであつて，キリストの聖餐には直接には関連していない。この意味で，イグナテイオスの書簡にあらわれた thusia はパウロなどが用いている意味と同一であつたと言えよう。しかし，そのことの故に，イグナテイオスの中に，聖餐物質を thusia と見る思想がなかつたと断定を下すことは早急である。そのことについてはイグナテイオスにおける thusiastērion の用法について論じた項をここで再び想起してもらいたい。その結果，言えることは，イグナテイオスに，聖餐の卓を祭壇と呼ぶ考え方がある以上，その上にのせるエレメントを thusia と理解する思想があつたと断定する方が恐らく適切であろう。

イグナテイオスの聖餐観を知るために参照すべき，さらに一つの文章が，かれのエペソ教会に送つた書簡（20章2）の中にあるが，それによると，聖餐のパンは「不死の薬であり，死を防ぐ解毒薬である」ho estin pharmakon athanasias, antidotos tou mē apothaineiv と説明が加えられている。ここで，早くも，後世のカトリツク教会の説く「化体」transubstantiation の思想と相通ずるものが，現わされているようである。

次ぎにデイダケーに觸れたい。それが書かれた年代を確定することは困難であるが，その14章に次のような注目すべき文章がある。（但し，この文章の訳し方には問題があるので一応原文を引用する。）

Kata kyriakēn de Kyriou synachthentes klasate arton kai eucharistēsate proexomologēsamenoi ta paraptōmata hymōn, hopōs kathra hē thusia hymōn ē.（また，主御自身の日において，あなたがたは共に集つて，まずあなたがたの罪を言いあらわしてパンをさき感謝をしなさい。それはあなたがたの犠牲が清くあるためである。）ここに thusia なる語が，聖餐物質を指すものとして用いられて

いて，この文章に続いて，14節でさらに2回 thusia なる語が使用されている。キッテル編集の「新約聖書神学典辞」Kittel. Theologisches Wörterbuch Zum Neuen Testament. の中でベーム Behm は，ディダケーにおける聖餐を論じて，それはすでに最原始の教会の聖餐観とは異つたものになつていると見て，次のように述べた。Aber es mischen sich in Didache doch auch fremde Töne unter die eht urchristlichen…… Der Begriff Opfer taucht in der Abendmahls-terminologie auf (14 : 1 fb). freilich zunächst nur auf das eucharistische Gebet bezogen.

これまで，聖餐は，キリストより，すなわち上から与えられた Gabe であつたのに対して，ディダケーになると，むしろ，われわれがキリストに，すなわち下から上に向つて捧げるものに変化した。これについて，キヤリングトン Carrington のごとき者は，その「初代教会史」The Early Church Vol. I p. 498. において，キリスト者がこのように，下から上に向つて聖餐を見るようになつたのは，ユダヤ的伝統によると説明するが，その説明の仕方の当否は別として，早くもディダケーの中の中にこのような，聖餐観の変化が見られることは疑い得ない事実である。

以上論じて来たことによつて次ぎのようなことを知り得ると思う。紀元100年頃を，はつきりとした境界線として，それ以前は新約聖書の時代であり，それ以後は使徒教父の時代であつた。紀元100年から，聖餐についての理解の仕方に変化が現われ始め，ローマのクレーメースから少しずつそれが現われて来た。ディダケーやイグナテイオスになると，かなり明白な形となつて，古カトリツク教会の聖餐観を示している。後のカトリツク教会の主張する「化体説」の萌芽がすでに紀元100年代に見られる。この変化が，新約聖書の聖餐観からの正常なる必然的発展であるか，それとも，正常ならざる異質化であるか。ここに重大な論争点がある。今，この論争点に觸れないが，プロテスタントとして聖餐を守る者は，紀元100年頃を境界線とする右のような聖餐観の変化を一応十分に理解した上で，それにあずかるべきであろう。